

マンゴーの果樹園

イーシャ・サーデサイによる再話

それは夏の時期で、マンゴーの果樹園の空気は甘く香っていました。この果樹園には木々が幾重にも立ち並んでいました。それは見渡す限りに広がり、それぞれにマンゴーがたわわに実っていました。マンゴーの表面は赤みがかったオレンジ色で、その色は知っている人には分かる、はい、もう食べ頃ですよ、というメッセージでした。

その果樹園は、心優しく寛大な女性のもので、彼女の家族は何代にもわたってそれを所有し世話をしてきました。毎年、マンゴーが十分に熟すと、彼女は1日選んで、町の人々のために果樹園を開放しました。若者でも老人でも、金持ちでも貧乏でも、誰もが招待されました。

唯一の条件は、その日、果樹園を開けるのはきっちり3時間だけ、というものでした。その3時間に、人々は好きなだけ——無料で——マンゴーを採って食べることができました。そして籠いっぱいのマンゴーを家に持って帰ることができました。しかし3時間たつと、外に出なければなりませんでした。

その特別な日が巡ってきました。太陽は柔らかく明るく輝き、木々の間に万華鏡のような影を作っていました。空は快晴で、雲一つない青色でした。まさに熟したばかりの果物の甘い香りが、じらすように空気中に渦巻いていました。果樹園の門の外側に、列ができ始めていました。

大きな笑みで、オーナーは集まった人々を出迎えました。

「ようこそ！」と、彼女は言いました。彼女は、優美な鉄の門扉に指を巻きつけて中をのぞいている何人かの子どもたちを見下ろしました。「マンゴーを採る準備はいいですか？」

子どもたちは、目を大きく見開いて彼女にうなずきました。

「そう、でしたら」と、彼女は言いました。「どうぞお入りください！」

そして彼女は門のかんぬきを外し、皆を中へ招き入れました。喜びの拍手や歓声が上がり、最初に子どもたちが走り出し、すぐにその親たちや他の大人たちが続きました。やがて人々は果樹園の中をそぞろ歩き、最も良さそうな木を指さして、おいしそうな果実に手を伸ばしました。木陰に座り、ご褒美の蜜のように甘いマンゴーの果肉を切り分けると、その果汁は彼らの腕に滴り落ちました。皆が最高の時間を過ごしているように見えました。

皆が、そう、1人を除いて。門の所に立ち、体の半分は果樹園の中に、半分は外に出ているのは1人の男性でした。彼は目の前で起きていること——戯れ、食べ、笑っている人たちを、眉を寄せて見ていました。

果樹園のオーナーはこの男の困惑している様子を見て、彼の方に歩いて行きました。

「失礼ですが」と、彼女は言いました。「中に入ってマンゴーを食べませんか。自分で言うのも何ですが、とてもおいしいですよ」

男は返事をする前にためらいました。額のしわがいつそう深くなりました。「ここに来たときはそうするつもりでした」。彼は言いました。「ここにはマンゴーがあり、誰もが自由に食べてよいと聞きました」

「はい、その通りです」と、オーナーは言いました。彼女は彼を励ますようにほほ笑みました。
「ですから、どうぞお入りください」

「まあ、その…」と、男は口ごもりました。

「どうしたのですか？」と、オーナーは尋ねました。

「私——私は分かりません」と、男が返事をしました。不意に彼から言葉が飛び出しました。「私はマンゴーを食べたいと思っていました。だからあなたの果樹園まではるばる歩いて来ました。しかし私は今ここにいて、木々とマンゴー、そして人々を見て——それはまるで絵画のようで——私は考え直しているところです」

「どんなふうに？」と、オーナーは尋ねました。

男はもう一度辺りを見渡し、木とマンゴー、この地球の恵みをおいしそうに食べている人、その一つ一つ、一人一人を見て、目を見開きました。「私が言いたいのは、こんなことが現実にあるのか、ってことです」。とうとう彼は叫びました。「マンゴーを全部食べていいのですか？ それもこんなに見事なマンゴーを？ いやいや、これは出来過ぎた話だ。何か、わながあるに違いない」

「何もありませんよ」と、オーナーは言いました。「私はあなたがここでマンゴーを食べてくれれば、それが嬉しいのです。ただ、時間制限があることだけは覚えておいてください。一日中果樹園を開けておくわけにはいきません。ですからすぐにお入りください」

男はほとんど彼女の話聞いていませんでした。自分の考えと感情の渦に巻き込まれていました。

「正直に言うと」と、彼は言いました。「ここにいるべきかさえわからない。私は何を考えていたのだ？ 家のことだってやることがたくさんあるのに。ここにいてマンゴーを食べようとしているなんて！」

「あの」——オーナーは言葉を挟もうとしましたが、男はもう彼女のことを見てもいませんでした。彼は地面を凝視し、草に向かってブツブツ言っていました。

「ここに座りマンゴーを食べる私はどんなやつなんだ？」と、彼は言いました。「私はそれに見合う何をしたのか？ きっと、マンゴーは良い行いをした人たちのためのものだ」

「マンゴーはみんなに！」 オーナーは叫びました。「それが肝心なんです」

男は彼女を見上げました。「みんなに？」 彼は不思議そうに言いました。

「そうです」と、オーナーは繰り返しました。「みんなに」

男は口を開き、もう一度閉じました。一瞬、彼の目の奥で何かがきらめいたように見えました。しかしまた暗くなりました。彼の顔が曇りました。

「ああ、でもあなたは私のことを知らない。私は間違いなくここにいる他の人たちとは違う。これらのマンゴーを受け取っていい人間のわけがない…」

彼はこのように続け、その思考と言葉はさらに混乱し、興奮していきました。ついに、オーナーは彼をなだめるのをあきらめました。彼女には他にも気にかけるべき客がいます。彼女は、門前でまだ独り言を言っている彼の元を去りました。

しばらくして、人々が両腕にマンゴーの大きな籠を抱えて、果樹園の外に出て来ました。それを見て、男はハッとしたようでした。

「ちょっと——どこに行くのですか？」と、彼は尋ねました。

「聞いていなかったのかい？」と、その中の 1 人が答えました。果樹園はあと1分で閉まるよ。もしマンゴーが欲しいなら、急いで！ すぐに採った方がいいよ」

しかし、悲しいかな、彼は急がなかったのです。代わりにうなだれました。「ああ、なんてことだ！」彼はうめき声を上げました。「なぜこんなに長く待っていたんだ？ どうしてこんなにもばかなんだ？ もうあと1分しかない…」

こちらへ向かって来る果樹園のオーナーが見えました。「申し訳ありません」。彼女は彼が立っている所に来て、丁寧に言いました。「これで果樹園を閉めなければなりません。3時間たちましたので」

彼女が門扉に手を伸ばすと、男は言葉なく1歩下がりました。鉄の扉が彼の前で動き、ガチャンと鍵が掛かりました。そして日が暮れて、男はただそこに立っていました。マンゴーはすぐ向こうにありました。

